

引用文献

- BEATTY, S.W. 1984. Influence of microtopography and canopy species on spatial patterns of forest understory plants. *Ecology* 65: 1406-1419.
- BRAUN-BLANQUET, J. 1964. *Pflanzensoziologie*. 3 Aufl. 865pp. Springer-Verlag., Wien.
- HILL, M.O. 1973. Reciprocal averaging: An eigenvector method of ordination. *J. Ecol.* 61: 237-249.
- . 1979. TWINSPAN-A FORTRAN program for arranging multivariate data in an ordered two-way table by classification of the individuals and attributes. Ithaca, N.Y., Cornell University.
- and GAUCH, H.G. 1980. Detrended correspondence analysis, an improved ordination technique. *Vegetatio* 42: 47-58.
- HUKUSIMA, T. and KERSHAW, K.A. 1988. The ecology of a beech forest Mt. Sanpoiwadake, Hakusan National Park, Japan. I. BRAUN-BLANQUET, TWINSPAN and DCA analysis. *Ecol. Res.* 3: 89-100.
- , —— and LOONEY, H.J. 1987a. The impact on the Senjogahara ecosystem of extreme run-off events from the river Sakasagawa, Nikko national park. II. The correlation of vegetation and environmental disturbance using TWINSPAN and DCA ordination techniques *Ecol. Res.* 2: 85-96.
- , ——, WATANABE, I. and NASHIMOTO, M. 1987b. Classification and ordination of the beech forests of Hokkaido, Japan. Papers on plant ecology and taxonomy to the memory of Dr. Satoshi NAKANISHI, 57-65. The Kobe Geobotanical Society.
- KERSHAW, K.A. and LOONEY, H.J. 1985. *Quantitative and Dynamic Plant Ecology*. 282pp. Edward Arnold, Baltimore.
- 吉良竜夫. 1945. 農業地理学の基礎としての東亜の新気候区分. 23 pp. 京大園芸学研究室.
- . 1948. 温量指数による垂直的な気候帯のわかちかたについて. 一日本の高冷地の合理的利用のために. *寒地農学* 2: 143-173.
- 小林圭介・村長昭義・竹田雅治・蓮沼 修. 1976. 竹原周辺の植生. 41pp. 中国電力都市緑地研究所, 広島.
- LAHTI, T. and VAISANEN, R.A. 1987. Ecological gradients of boreal forests in South Finland: an ordination test of Cajander's forest site type theory. *Vegetatio* 68: 145-156.
- 南川 幸・矢頭猷一. 1962. 鈴鹿山脈森林植生の植物群落学的研究 (第2報). *三重大学農学報* 25: 61-97.
- 宮脇 昭. 1967. 二次林 I クヌギーコナラ林. 宮脇昭編著「原色現代科学大事典 3 植物」, 95-99. 学研.
- ・藤原一絵・原田 洋・楠 直・奥田重俊. 1971. 逗子市の植生. 177 pp. 逗子市教育委員会.
- 奥富 清・辻 誠治・小平哲夫. 1976. 南関東の二次林植生—コナラ林を中心として—. *東京農工大学演習林報告* 12: 55-66.
- 斎藤員郎・寒河江秀寿. 1988. 船形山西山腹の自然植生とその分布構造. *山形大学紀要 (自然科学)* 12: 35-51.
- 鈴木伸一. 1985. 夏緑広葉樹二次林. 宮脇昭編著「日本植生誌 6, 中部」, 79-85. 至文堂, 東京.
- 鈴木時夫・鈴木和子. 1971. 日本海指数と瀬戸内指数. *日生態会誌* 20: 252-255.
- TAYLOR, S.J., CARLETON, T.J. and ADAMS, P. 1987. Understorey vegetation change in a *Picea mariana* chronosequence. *Vegetatio* 73: 63-72.
- THORNTON, C.W. 1931. The climates of north America according to a new classification. *Geogr. Rev.* 21: 633-655.
- . 1948. An approach toward a rational classification of climate. *Geogr. Rev.* 38: 55-94.
- 和田 清. 1982. 本州中央部の内陸地域における夏緑広葉樹林の植物社会学的研究 (I). *信州大教育志賀自然教育施設研究業績* 20: 1-39.
- . 1983. 本州中央部の内陸地域における夏緑広葉樹林の植物社会学的研究 (II). *信州大学教育学部紀要* 48: 221-254.
- WHITE, J.A. and GLENN-LEWIN, D.C. 1984. Regional and local variation in tall grass prairie remnants of Iowa and eastern Nebraska. *Vegetatio* 57: 65-78.

(Received April 20, 1991)

○ エクスカーション「医王山」の報告 (古池 博) Hiroshi FURUIKE: An Excursion to Mt. Iozen.

1991年度大会のエクスカーションは6月9日(日曜日), 金沢市郊外の医王山を舞台に, 植物分類地理学会のかたがたの参加を得て実施された。

この朝、約束の午前8時30分に金沢大学角間新キャンパス・C駐車場に集合したのは、予想通り自動車27台(他に4台が駐車場に駐車)・参加者92人の大部隊。これをコース別に赤、白、青の3隊に編成し、それぞれ地元の高木、高木、依田の各会員が各隊の案内(責任)者となった。会長挨拶や事務連絡ののち、各車両に所属の隊を示す赤、白、青のリボンをなびかせて、出発したのは予定の9時を少し過ぎたところで、まことに壮観であった。うち赤隊は車両11台・参加者38名、白隊は車両6台・参加者26名、青隊は車両10台・参加者28名の編成であった。各隊の行動は通過時間や観察地点をずらせることで、重複による混雑を避けるように予め調整した。各隊のコースはつぎの通りである。

赤隊：角間キャンパス(出発)→医王山口→見上峠→西尾平→夕霧峠→奥医王山→夕霧峠→国見→二俣→角間キャンパス(解散)

白隊：角間キャンパス(出発)→医王山口→見上峠→西尾平→硯→夕霧峠→白はげ山→夕霧峠→国見→二俣(解散)→(角間キャンパス)

青隊：角間キャンパス(出発)→医王山口→見上峠→夕霧峠→国見→大池→硯→西尾平→夕霧峠→国見→二俣への分岐点(解散)→(角間キャンパス)

予定の解散地点は角間キャンパスであったがその通りとなったのは赤隊だけで、他はコースの事情や参加者のその後の日程などを配慮して各隊の責任者の判断で適宜解散した。責任者はすべて角間キャンパスに戻ってくるようになっていたが、その最終は午後5時少し前になった。

医王山は金沢市の東方、富山県との県境にそびえる山塊で白山山系の北端に位置し、最高地点は奥医王山の939.1mである。山麓には第四紀の火山である戸室山548mがある。医王山の主要部は医王山累層(第三紀中新世前期)の火砕岩類・流紋岩よりなる。植生分布は奥医王山・白はげ山を含む上部はチシマザサ・ブナ群団に属するブナ林であるが、中部以下はブナ・ミズナラ林、クレーミズナラ林などの代償植生となっている。400m以下は代償植生のコナラ林が優占する。植林としてはスギ林が多い。山麓の植生域の原植生には不明の点が少ないが、二俣の医王山神社の社叢林に見るようなウラジロガシ林がそのひとつと考えられている。植物相はきわめて豊かで現在のところシダ植物以上で819種が確認されているが実際はこれよりはるかに多いものと推定されている。泉鏡花の小説「葉草取」の舞台としても有名であるが、それはこの山の植物の豊かさと神秘的な山深さによるものであろう。

コースは時間の制約のもとで可能なかぎりその植物相・植生が観察できるように選択された。

赤隊は、ブナ林の尾根を観察しながらゆっくり歩いて奥医王山山頂に到着。昼食ののち、里見先生から医王山の地名と日本海要素について、村田先生から変異と進化などについて、このコースの知見をも引用しての含蓄に富んだお話をいただいた。若くて元気な参加者の多い白、青の各隊は足にものをいわせて長いコースを踏破し、トンビ岩下の大地では浮島に生育するミツガシワやムジナスゲを観察するなど、それぞれに有益な一日であった。(〒920金沢市本多町2-2-3金城高等学校 Kinjo High School, Hondamachi 2-2-3, Kanazawa 920)

○ 中沢信午「生き生き」の世界 生物学からの発想 新日本新書437。新書判205頁。新日本出版社。1991年9月発行。680円。

山形大学在職中、植物の細胞分化の研究をされ、「形態形成の原理」や「細胞分化」の著書で知られ、メンデル研究者としても名高い著者は、現在は京都に在住され執筆活動を続けておられる。

本書は、御専門の細胞の極性あるいは極性軸の観点を、「すべて生き生きとした世界には一つの極性軸があり、万事がそれによって制御されている」という自然観、世界観に発展させた誠にユニークな科学随筆である。たとえば、新訳聖書の「はじめにロゴスありき」は結局はロゴスとは極性軸のことであり、宇宙や生命の根源は極性軸の形成からはじまること、細胞の発生や能動輸送は極性軸にそって進行することなどの生命現象はもちろん、東ベルリンから西ベルリンへの民衆の移動、光と影、喜びと悲しみもすべて極性軸上にあるといった調子で、一つ一つなるほどとうなづかされる。本の構成は1. アナロジー、2. 極性軸、3. ラセン形、4. 生き生きとした世界の4章立てであるが、著者の主張は一貫してこの極性軸にある。私はかつて、ネオテニーとハイパーモルフォシスといったみかたで万物をみることができなかと考えてみたことがあったが、この極性軸による観点には及ぶべくもない。地球の自転方向、川の流れ、列車の運行、音楽、ことば、小説、歴史の流れ、時間の経過、エネルギーの伝導など不事極性軸に従って動いているという指摘は私にとって一つの驚きでもあった。今度、教養課程の生物学の講義を受けもつようなことがあれば、この本をテキストに使ってみたいと思う。それほどに小さいながら生物学にも人生にも示唆にあふれた本なのである。(清水建美)